

# 吉良上野介とは何者だったのか

— 史実、伝承、虚構のはざままで —

川田 順造

一、はじめに

大山大山で第三六回日本口承文芸学会大会が開かれ、地元愛知県にかかわる伝説について公開講演をするよう依頼を受けた機会に、かねてから関心をもっていた、『忠臣蔵』の敵役として知られる、三河国幡豆郡吉良庄（現在、西尾市に合併）の領主吉良上野介義央<sup>よしひさ</sup>をめぐる伝説について、考えてみたいと思う。

三河の吉良家は、承久の乱に戦功のあった清和源氏足利義氏の庶長子・吉良長氏の末裔で、鎌倉時代から西条吉良の領主だった。吉良家の定紋「丸の内に二つ引き」も、足利氏との血縁を表している。徳川家康の祖父に当たる松平清康の娘の子とされる吉良義定は、関ヶ原の戦功で家康に旗本に取り立てられ、吉良氏を再興した。義定の曾孫に当たる義央は、十三歳の時父に伴われて四代將軍家綱に拜謁、四年後の明暦三年（一六五七）には従四位下に叙され、侍従兼上野介に任じられて、出世街道の幸先よいスタートを切った。【図①】。続く五代將軍綱吉の信

任も厚く、徳川幕府の高家の極位である左近衛権少将として、京都の朝廷への使者にも高家として最高の二四回立ち、微妙な関係にあった朝廷との重要なパイプ役を務めた。

はからずも現代にまで国民規模で有名になった、吉良上野介をめぐる伝説の形成には、書承としての文書史料、読み本・戯曲などの書承、肖像や錦絵の図像⇨視覚表象、講釈などの語り芸⇨聴覚表象、芝居・映画・テレビドラマなどの総合的行為芸（performing arts）表象、そして口承（これらすべてに、意図された、あるいは意図されていない虚構が含まれている可能性がある）が果たした役割など、多様な媒体が関わっており、伝説の形成を考える事例としても興味深い。本稿では到底完結できないが、初次的な整理を試みたい。

## 二、忠臣蔵症候群<sup>シンドロム</sup>

元禄一五年（一七〇二）二月一五日未明、江戸本所の吉良邸



らすことになったのである。

浪士討ち入りから八年経った宝永七年（一七一〇）より前と推定される時期に、当時すでに『世継曾我』『曾根崎心中』などで浄瑠璃作者として知られていた近松門左衛門は、綱吉没の直後ではあったが、幕府の忌避に触れないよう『太平記』の世界に、場も登場人物の名も移した、だが当時の見物にはすぐ赤穂浪士の一件と分かる、『兼好法師物見車』を上、中巻とし、その「後追い」『碁盤太平記』を下巻として、大坂道頓堀の竹本座で人形浄瑠璃として上演した。高師直、塩冶判官高貞、大星由良之介、大星力弥など、この作の主な登場人物名や、高師直が塩冶判官高貞の美人妻に横恋慕するが、叶えられず塩冶判官を切腹に追い込むという、『太平記』巻第二十一から借りた筋立ては、その更に三八年後の、二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作の『仮名手本忠臣蔵』の原型になった（大星由良之介は大星由良之助または由良助に、塩冶判官高貞は時に塩冶判官高定に変えられたが）。

近松門左衛門が亡くなって二四年目の寛延元年（一七四八）、前記近松作品と同じ道頓堀の竹本座で、人形浄瑠璃として上演された『仮名手本忠臣蔵』は、五カ月続演の大入り。終わるとすぐ歌舞伎として道頓堀の嵐三五郎座で、翌寛延二年には江戸の森田座、ついで江戸三座でも歌舞伎として上演され、いずれも大当たりを取った。爾来現在まで二六〇年余り、第二次大戦での敗戦直後、占領軍の指令で封建道徳賛美の演劇として禁止

されていた数年間を除くと、毎年必ず、三都を始めとする日本のどこかで、歌舞伎か人形浄瑠璃として上演され続け、しかも芝居の独歩湯、これを出すと必ず満員になると言われて来た。

赤穂浪士の一件を脚色した芝居は、事件直後から、数多く作られ上演されて来たが、多様な趣向を巧みに取り合わせた『仮名手本忠臣蔵』くらい、不動の人気を保って来たものはない。因みに幕末の嘉永三年（一八五〇）、座付作者西澤綺語堂一鳳がそれまでの「忠臣蔵」の浄瑠璃を網羅的に集めた『忠臣蔵浄瑠璃集』には、近松の『碁盤太平記』から明和九年北脇素全ら四名合作の『忠臣後日晰』にいたるまでの、奇しくも四七編の「忠臣蔵もの」が採録されている（西澤綺語堂一鳳、一八九六）。

明治以後になると「忠臣蔵もの」は、それ以前からの芝居講釈、読み本などに加えて、映画、小説、ラジオやがてテレビと、多様な媒体で、『仮名手本忠臣蔵』を下敷きに、新しい解釈や工夫を加えた諸々が、新暦に移された討ち入りの十二月には集中して公開され、「忠臣蔵症候群」として、時代を超えて「忠臣蔵大好き」日本人の、思考、心情の深層を、鏡にかけているかのようだ。歴史上の出来事を指すのに、それを脚色した芝居の名が通称になっている、稀な例ではないだろうか。テレビドラマなどで新工夫があるにせよ、「忠臣蔵もの」で吉良上野介（『仮名手本忠臣蔵』での高師直）は、好色で、権勢を嵩に賄賂を取る高級官僚という、立前としての潔癖を好む日本人にとつての、諸悪の体現者のイメージで描かれることが多い。

### 三、悲運の名君？

だがかつての吉良家の領地吉良では、義央は親しみをこめて「吉良さん」と呼ばれ、農民が使う赤馬に跨がって領地を視察し、地元民のための治水・灌漑事業に尽くした殿様として、現在も敬愛されている。

慶長五年（一六〇〇）吉良義定は、父義安が開基した、吉良町岡山の臨濟宗妙心寺派華藏寺を、高家吉良家の菩提寺として再興した。本堂の建築には、江戸時代初期、茶道だけでなく、造園、建築でも活躍した小堀遠州が関わったといわれている。現在裏手の墓所には、義安から、義央の養子で諏訪に配流されて病没した義周まで、吉良家六代の墓がある。

華藏寺の山門を入った参道端には、大正七年（一九一八）この寺に詣でた、弱者への共感で知られた俳人村上鬼城が画帳にしたためたという、「お気の毒な吉良様、三百年もの間世間では憎まれなされた、あんなに名君でありながら…」という言葉を書いた西尾市教育委員会が立てた掲示があり、傍らに「行春や憎まれながら三百年」の句が、石に刻まれている。

石段を登り切って、独特の切妻屋根の棟門をくぐると、前庭をはさみ本堂に向かい合って、朱塗り瓦屋根の鐘堂が建っている。平成九年、吉良町教育委員会が立てた札には、「町指定文化財 華藏寺梵鐘 元禄三年（一六九〇）、吉良さん（吉良上野介 義央公）は、五〇歳を期してこの梵鐘を寄進する。戦時中の供出

も免れて、吉良さんの遺徳を今に伝える。云々」と記されている。本堂裏には、千宗且晩年の弟子でもあった茶人義央（上野介の上を分解した「ト一」と号した）が作らせた枯山水の庭がある。義央はこの庭を眺めながら茶を喫し、大本山妙心寺から住持として招いた天英和尚と話すことを好み、領地に来た時には、吉良岡山の陣屋には泊まらず、華藏寺で寝起きしたという。

本堂の左手、西側奥の、石灯籠に挟まれた低い石段を十三段上がったところに、義央が建立させた「吉良氏影堂」という堂がある【写真①】写真はすべて筆者撮影。徳川方で関ヶ原を戦った、この寺の開基でもある義安を中央に、向かって右に義定、左に義央が五〇歳を記念して刻ませ、自分で彩色したという、吉良町のあちこちで写真を見かける義央自身の座像が、並んで置かれている【写真②】。義安と義定の像は、吉良町歴史民俗資料館に展示されている写真で見える元の像ではなく、新しく作り直した、特に義安の像は、いかにも俄づくりの安っぽいものだ。吉良家で従四位上の位を得た三人を、中でも四〇歳で高家の極官である左近衛権少将に任官され、吉良家で最高の位に就いた義央自身を祀ったのである。堂を立て、世俗的出世を勝ち取った自身自身を礼拝の対象として顕彰する―高潔、聡明な人のすることではないという感慨を、つい私は抱いてしまう。

一段高く石垣に囲まれて、吉良家の副紋「五三桐」を上に乗せた「高家 吉良家墓所」の石柱の立つ墓地がある。墓地には、吉良義安と夫人、義安の子義定、その子義弥、その子義冬、そ



写真①

の子義央、義央の孫に当たる養嗣子義周、義央の次男で夭折した三郎、やはり夭折した義央の次女アグリ子をはじめとする、一族の墓がある。

義周は討ち入り当時一八歳だったが、すでに養父の義央から家督は譲り受けていて、本所の吉良屋敷の主だった。討ち入りで重傷を負って気絶したが放置され、一命は取り留めた。だが、翌年二月四日（義士たちの切腹の日）に幕府評定所に呼び出され、「旧臘十四日、浅野内匠頭家来共押し込み候節、不埒なる仕形、



写真②

不届きに思召され候。これによつて領地これを召上げられ、諏訪安芸守へ御預け仰せ付けらる」と申し渡され、ただちに佩刀を取り上げられ、諏訪藩士警護のもと、罪人籠で市ヶ谷の諏訪藩邸に運ばれ

た。「松の廊下」の時は、義央が、応戦しなかったという理由で、傷の手当てを受け、「お構いなし」となったのとは、まさに逆の罪状認定だ。

二月一日、諏訪藩の武士五〇人の警護で配流先の諏訪高鳥城に入った。劣悪な環境の幽閉生活で、持病の疝気もあって体調が悪化するなか、翌年には実父上杉綱憲を亡くし、配流後三年目の宝永三年（一七〇六）正月、直接には疱瘡がもとになつて二一歳で病没。吉良家は絶えてしまふ。

討ち入り前年の、「松の廊下」の性急な一方的処分を償おうとする幕府の、過剰なまでの反吉良の措置という他はない。悲劇の若殿のために、吉良家墓所には十三重の義周公供養塔も立てられている。塔には、

「公よ忍べ ただひたすらに 忍べよかし  
公の隠忍は知る人のみ知る  
真の強さなればなり」

と刻まれている。義周の墓は、諏訪の幽閉先で病死後葬られた地元の法華寺にもあるという。他に供養塔としては、昭和五一年（一九七六）に新しく立てられた吉良公家臣供養塔がある。

興味深いのは、この家臣供養塔のすぐ右奥にある、吉良ライオンズクラブが平成一四年（二〇〇二）、「吉良さん三〇〇回忌記念」と銘打って寄贈した、『桐の花影 元禄事件吉良家臣忠死者』と題する大きな石板だ【写真③】。討ち入りの時の防戦で落命した者一七名、重傷を負い浪士引き揚げ後に落命した忠



死者九名の姓名と墓地、役職が、一覽となつて彫られている。注目されるのは、合計二六名の忠死者のうち、墓地が分かっているのは、清水一学(円融寺)など僅か五名だけということだ。役職で見ると最も多いのが、義周附と記されている八名だ。別の資料によると、義周の実父上杉綱憲から、討ち入りに備えて三名が義周警護のために派遣されていたというが、その三名が忠死者のうちに含まれているのかどうかは不明だ。

吉良ライオンズクラブの人たちは、一つまみの苦いユーモアを添えるのも忘れていない。名簿の後には、小さく「忠死でも吉良の家来の名は知れず」江戸時代川柳集「誹風柳多留」と彫らせている。実際、この吉良家墓所を訪れると、高輪泉岳寺の四六士の墓地との対照に、驚かされる。(周知のように、討ち入りに加わつたと言われている四七人のうち、当時三八歳だった足軽の寺坂吉右衛門は、引き揚げ後泉岳寺まで行かず、原因はさまざまに取り沙汰されているが、自首も切腹もせず、八三歳まで生きた。)

私が華蔵寺の吉良家墓所を訪れたのは、平成二三年(二〇一一)九月一九日、月曜日だが敬老の日で晴天に恵まれ

た祭日であり、のどかな秋日和の昼過ぎだった。三〇分近く写真撮ったりノートしたりしながら、ゆっくり訪れた墓所では、他の参拝者には一人も逢わなかった。義央公の墓に花と線香と小さい蠟燭が上がっていて、蠟燭一本と線香三本が燃えていたが【写真④】、他の墓への供え物は、気をつけて見たが一切なかった。何度もいろいろな時間帯に訪れた泉岳寺の墓地では、他の参詣者に逢わなかったことは一度もなく、浅野長矩の墓【写真⑤】にも、大石良雄の墓【写真⑥】にも、他の義士たちの墓【写真⑦】にも、花が供えられかなりの数の線香が煙を上げていなかったことはない。泉岳寺裏のアパートが安いので引越そうかと思つた私の友人が、昼間は線香の煙がひどいので窓が開けられないことを知り、取り止めにした話がある。

泉岳寺は、外人観光客も訪れる【写真⑧】、東京の観光スポットの一つでもあり、泉岳寺という地下鉄の駅もある。華蔵寺のように、マイカーで行くか、私のように本数の少ない私鉄の駅から、かなりの料金を払ってタクシーで往復するかしない限り、他所から来た人が訪れるのはむずかしい寺とは、交通の便だけを取り上げても比較にならない。

だが討ち入り直後には、幕府が泉岳寺への墓参を禁じた時期もあった。翌元禄一六年(一七〇三)七月十三日、義士の内にいた俳人三人の新盆に泉岳寺に墓参に行った宝井其角が、参詣が許されず、墓地には草が丈高く生い茂つて、墓が並んでいるのも見えなかったことを遺稿『類柑子』(宝永四



年（二七〇七）刊に記している（復刻本、二〇一二、一〇九頁）。だが、幕府による規制が長続きしなかったことは、その後の江戸時代の夥しい各種資料から明らかだ。

吉良家墓所の入り口左手に、「真実を求めて」と題した、吉良Ⅱ浅野・赤穂浪士の葛藤は、真実に基づき、恩讐をのり越えて解決すべしとする長文が、大きな石板に彫って建てられている。吉良出身で実業家として成功し、郷里の文化活動にも貢献し、昭和五〇年（一九七五）吉良町名誉町民となった大竹仙松（一八九九〜一九八四）が、その翌年、吉良公家臣供養塔が新しく立てられたことも記念して、彫らせ寄贈したものだ。大きな視野から述べられた、優れた見識と言える。華藏寺で気付いて興味をひかれたのは、境内に

貼り出されていた『田舎衛生第二放送の俳句王国スペシャル』「18回市民参加俳句大会」の入選作に、吉良の殿様を讃えたものが目に付くことだった。「吉良様へきょうの薫風お供えす」「吉良公の気どりなき顔風薫る」「赤馬の殿様まじか風薫る」「赤馬や吉良が大好き風薫る」など。後の二句にある「赤馬」については、次に述べよう。

#### 四、赤馬に乗った吉良さん

吉良出身の人気作家尾崎士郎の『吉良の男』（中央公論社、一九六一）は、吉良義央にも、幕末の博徒で清水次郎長の子分として有名だった吉良仁吉（きらのにきち）にも、ひとしく深い共感を籠めて彼らの生きざまを描いた、明らかなフィクションも混じる、小説風随想とも言うべき書物だ。吉良で評判のこの本が、吉良義央公が領地に善政を施し、地元民に慕われていたとみる風潮を助長したことは間違いない。

西尾市にある吉良町歴史民俗資料館に展示されている、地元一色町出身で日本芸術院会員の彫刻家山本眞輔作「吉良義央公騎馬像」、いわゆる農民と同じ赤馬に乗って領内を視察する義央公の鍔金像（作品に「日展評議員」という肩書きが付いているところから推して、おそらく一色町名誉町民になった二〇〇〇年以後、日本芸術院会員になる二〇〇八年以前の作）は、その下につけられた『吉良の男』冒頭の一節、「若くして友情に厚く、

隣人に慕われ、功成り名遂げた後は善行という善行の限りをつくし、人生の行路ようやく終りに近づこうとするに及んで、運命はだしぬけに逆転する。尾崎士郎」を記した札と共に、名所「黄金堤（こがね）」——「領内老若男女ごぞつて工事に参加し、一晚で完成したと伝える」、吉良さん善政の最たるもの（黄金堤下の西尾市教育委員会の表示板）——の下にも建てられており、公の場にしつらえられた画像＝視覚表象として、義央の赤馬視察伝説を補強するのに大きな役割を果たしている（尾崎士郎の文だけは、華藏寺の義央の墓の脇にも立て札としてある）。

華藏寺前の道路の交差する地点にも、この像は建てられているが【写真⑨】、台座に彫られた、『吉良の男』から引用された文言は黄金堤のものより長く、内容も華藏寺に合わせたものだ。「吉良上野が、五十二歳になった元禄五年の春、飄然として領地へ帰ってきた。着いたのは三月はじめの雨の日の夕方である。大気はまだうすら寒かったが、華藏寺には早くも春の気配が濼（たよ）っていた。その夜、上野介は、天英和尚の点ずる茶を喫したあとで歌をつくった。

雨雲は、今宵の空にかかれども  
晴れゆくままに出づる月かけ

俗念に一つの区切りをつけた彼の心境は歌の中に、ゆるやかな思いをひそめている。これこそ、いかにも名君の心境であろう。上野介は、長旅の疲れでその夜は、ぐっすりと眠った。」「吉良の男」一五頁、著書の文とは文字遣いに異同があるが、ここ



では碑文の文字遣いによる)

参勤交代によって領地、領民との接触が多かった地方大名と異なり、吉良家のような旗本は、常時江戸に詰めるいわゆる定府じやうぶであり、領地の管理は代官が行った。義央が初めて吉良の領地を訪れたのも、寛文八年(一六六八)父義冬の死去により二八歳で家督を相続してから九年目、延宝五年(一六七七)義央三七歳の一二月に、京都で用務を終えた後に立ち寄ったのが初めてであった。ところが確認されている(『吉良の人物史』、六八頁)。江戸の将軍家の許での公務繁忙に加えて、京都の朝廷への使者にも頻繁に立った義央が、東海道からもやや外れた吉良―藤川宿と岡崎宿の途中からは四里ほどの地点だが―を訪れて滞在することは、日程としてそれほど容易ではなかったのではないだろうか。

当時の記録によると江戸と京都の使者の往還には、片道一―二日かかっている。朝廷への使節に立つ時は、京都着の日を決められていたであろうし、江戸に戻る時も將軍への復命もあり、減多に寄り道はできなかったのではないだろうか。籠か馬で東海道の藤川か岡崎の宿場まで往還し、吉良で用を足せば、最短でも五、六日は、旅程に加えなければならなかったろう。

江戸から直接吉良に赴く往還には、これより遙かに多くの日数を要したはずだ。

もう少し詰めて可能性を考えてみると、寛文三年(一六六三)四代將軍家綱の時、義央は二度目の上洛に際し、一二歳で従四位上に昇進している。この時が二度目の上洛だったとすると、以後寛文四年(一六六四)から、上洛から病気のため予定より遅れて戻った時に起きた、「松の廊下」事件の年元禄一四年(二七〇一)の前年までの三六年間に二一回、つまり二年に一度よりもさらに頻繁に上洛していることになる。五〇歳の時、義央が華藏寺を訪れたのは間違いないとして、それまでの足掛け二八年間と、五〇歳以後五九歳で迎えた「松の廊下」の年までの九年間に、何度、何日間、義央は吉良に滞在できたのだろうか。

領地での最大の善政の例とされている黄金堤の建設も、史跡として西尾市教育委員会が堤の下に立てた表示板には、何年に建設が行われたかを記していない。『吉良の人物史』六八頁にも、「義央は貞享三年(一六八六)九月、吉良の岡山の背撫山せだてと瀬戸の寄名山の狭間に、双方の山端を利用して堤防を築いたと伝えられています(傍点川田)」とある。吉良町史編さん委員会編、吉良町発行で、初版二〇〇四年、二〇〇九年までに三刷を算えている『吉良の歴史』三四頁にも、「義央は吉良町岡山と瀬戸との間に、黄金堤こがねづつみと呼ばれる堤防を一夜にして築いたと伝えられています(傍点川田)」とあるだけで、史実としての記述にはなっていない。

『吉良の人物史』に記されている貞享三年（一六八六）という年の特定は、何に拠っているのか不明だが、この年を吉良義央の側から検討すると、長男三之助を第五代米沢藩主綱憲として上杉家を嗣がせたあと、義央の次男で嗣子の三郎が貞享二年（一六八五）九月に八歳で夭折し、綱憲や幕府とも協議した結果、綱憲の次男春千代を吉良左兵衛義周と改名させて養子とした、吉良家と上杉家の関係にとつて、危機的状況の数年間に当たっている（義央四五歳）。義周を最終的に元禄三年（一六九〇）江戸邸に迎え入れるまでの準備で、義央自身、出羽米沢へ赴くなど、身辺多事だった。吉良まで、堤防建設を指揮に出かける時間が果たしてあったか、疑問が残る。

インターネットの Wikipedia は、「吉良義央」の項目で、「要出典」としながら、「黄金堤は、元禄以前に作られていたことが判明している」と記している。今後の関連史料の検索が、必要であろう。

ともあれ、吉良の殿様への地元民の共感は、「忠臣蔵」で作り上げられ広められた悪役イメージへの反発として、時には過度と思われる現れ方もする。

昨平成二三年（二〇一一）二月にも、一市三町が西尾市に合併された記念公演として、西尾市文化会館小ホールで、次いで東京都江東区深川江戸資料館小劇場で、吉良の殿様を讃えるミュージカル仕立ての芝居『吉良きらきら』が、江原真二郎主演（吉良上野介役）で、西尾市で二日間三回、東京では二日

間二回上演され、多数の観客を集めた。主催者である有限会社トモエ / TOMOYE 有限責任事業組合と、後援の西尾市 / 西尾市教育委員会 / 西尾文化協会 / 吉良公史跡保存会の要請を受けて、「カッサイ」という名のステージアーティスト・グループが制作した劇だ。

私は観客の反応にも関心があつて、西尾と深川の両方を、深川では友人と一緒に観た。松の廊下の一件と討ち入り以後、共に冥界入りした浅野内匠頭と吉良上野介と、存命中の関係者などが、あの世と此の世を往還しながら、松の廊下や吉良の統治を描き、回顧するという構成の面白さはあるが、黄金堤構築を中心とする、吉良上野介と領民の親愛感に満ちた交流をはじめ、とにかく上野介の全面肯定の芝居だ。松の廊下一件以後は特に夫に批判的になり、別居し、墓地も別（江戸渋谷の、米沢藩の墓所東北寺）という富子夫人も、夫人の側から美男の義央を見初めた恋女房として、ひたすら美化して描かれている。

『忠臣蔵』によってしか吉良上野介を知らなかった東京公演での観客には、あるいは新鮮だったかも知れないが、私のように、ある程度吉良側のこと調べた後で観る者にとっては、一方的な作りごとが多すぎるように思われた。領民が吉良の殿様を賛美して、実際の地元民も加わって楽しみに歌い踊るシーンなど、外来者の私は観ていて白けてしまう。身内や知人も舞台で踊っている西尾の観客は、勿論喜んで喝采し、観劇後もロビーで出演者と一緒に写真を撮ったりしていたが、主催者や後援者

がねらったのも、この程度のことだったのかも知れない。多く  
の問題を孕んでいた吉良と上杉の関係も、吉良に都合よく「お  
めでたく」しか描かれていない。

ある意図のもとに拵えられた、ドラマが本来内包すべき対立  
などとは初めから無縁なこの種の見世物によっては、ほんとう  
に新しい吉良認識を観客に考えさせることはできないだろう。  
脚本執筆者には、西尾での観劇後に会って私の感想を伝えたが、  
折角の機会だったのに、私としても残念だ。

## 五、朝廷との関係、明治天皇による大石良雄の顕彰

大衆的人気にもかかわらず、徳川幕府としてはその立場上、  
大石良雄らの幕府批判の行動を、公に是認することはできな  
かった。だが明治天皇は、明治元年（一九六八年）一月五日、  
京都から新しい都東京へ初めて遷御した直後に、東京から、大  
石良雄らの墓のある泉岳寺へ勅使をつかわし、勅書と金幣を  
賜って、徳川幕府からは罪人とみなされてきた大石良雄らを公  
に顕彰した。【写真⑩】

現在も泉岳寺に保管・展示されている勅書には、「大石良雄ら、  
固く主従の義をとり、仇を復して法に死す。：朕深く嘉賞す。今、  
東京に幸するにちなみ、権弁事藤原猷を遣使し、汝等の墓を  
弔い、かつ、金幣を賜う」と漢文で記されている。当時一六歳だっ  
た明治天皇の、即位後初の新都東京への華々しい行幸は、二三

日かけ、途上数々の催しや下賜を伴う、事前に入念に計画が練  
られたもので、岩倉具視、木戸孝允ら総勢三三〇〇人が従った。  
一〇月一三日東京到着後間もなくの、この泉岳寺への遣使と勅  
書も、京都出発前から構想され、準備されていたに違いない。

大石良雄の顕彰は、徳川將軍代々の居居を皇居とするに当つ  
ての、旧幕府に対する更なる戒めの意思表示と、東京市民の義  
士に対する敬慕へのアツピールともとれるが、基本的には、ま  
だ戊辰戦争が終わっていないなかったこの時点で、天皇が明治新  
体制の中で「君に忠」の徳を強調しようとした行為と見るべ  
きであろう。楠木正成の  
「七生まで朝敵を滅ぼす」

四〇〇年前の精神が、明  
治の天皇親政の国家と天  
皇親率の軍隊の中で「七  
生報国」へと変貌したよ  
うに、四十七士の「忠君」  
が「忠君愛国」へと拡張  
されてゆく一過程が、そ  
こにも見られるのではな  
いか。

同時にこの勅書は、松  
の廊下から義士切腹まで  
の一件に、それまで公に



は一切発言を控えていた朝廷の、初めての明確な意思表示として、画期的な意味をもっている。それ以前の朝廷側の「松の廊下」と「討ち入り」についての認識と反応を、遺漏なく取り上げ適切な位置づけをしていると思われる平井の論文(二〇〇一)に依拠して、いくつかコメントを加えながら、略記しておく。

「勅答の儀」開始前の朝、松の廊下で刃傷事件が起きたため、將軍綱吉は高家の畠山基玄と戸田氏興を勅使の許に遣わし、この不祥事の後も予定通り勅答を行っても良いか奉伺させた。これに対して勅使柳原資廉は、死穢に及ぶことではないので、勅答を仰せ出されても構わないと答えて、將軍の意向に任せた。結局、勅答は白書院から場所を移し、松の廊下を通らずに行ける黒書院において滞りなく行われた。老中から方領支給の書付も渡された。

翌一五日は、勅使一行は予定通り上野寛永寺と芝増上寺へ参詣し、一六日の休息ののち、一七日に江戸を発つて三月二九日に帰洛。参内した勅使は、東山天皇からのお尋ねに対して、「喧嘩之義」をつぶさに言上した。松の廊下事件については、これより前、三月一九日に近衛基熙と東園基長が第一報を聞いたのが、朝廷側で確認できる最初の記録で、二〇日に近衛基熙が東山天皇に言上するなど、いくつかの経路で事件の報はすでに天皇に伝わっていた。

興味深いのは、近衛基熙が二〇日に言上した際、『基熙公記』によると東山天皇は「御喜悅之旨」を表し、近衛基熙も「歡

喜難尽筆頭」と記し、三〇日に近衛基熙に報告した勅使高野保春も「只朝廷之繁栄得其時者歟、心中歡悅之由」を談じていることだ。これは、後に取り上げる近松洋男の著書(近松、二〇〇三)に述べられている、長州とも組んだ若き日の近松門左衛門や大石良雄の朝廷派が、京都で赤穂の塩を幕府に回そうと腐心する吉良上野介と、対立関係にあったことと関連して、解釈できるのではないだろうか。

近衛基熙はまた、松の廊下の不祥事で勅答直前に流血穢を起こしたため、勅答を延期すべきか幕府側から奉伺したのでに対し、勅使が死穢に非ずとして理解を示した対応を褒めている。これは、微妙な均衡・緊張関係にあった朝幕間において、幕府に恩義を売る形で事態を収束させたことを高く評価したためと考えられる。

松の廊下の一件は、勅使に同行してこの年は数百名が江戸に下向したので、詳細な情報が朝廷や公家社会にもたらされているのに対し、討ち入りや義士の処置については、公家側の史料はきわめて乏しい。近衛基熙も全く記していない。松の廊下とは異なり、朝廷が直接関与しない討ち入りについては、始めから関心も低かったであろう。とはいえ、複数のルートから情報は伝えられていて、有職四天王の一人に挙げられるほどの識者であった野呂定基の日記が、簡潔ながら的確な評価をしている。

定基は、浅野長矩は自ら罪を犯して処刑されたのであり、大石が吉良を逆恨みするのは不当で、討ち入りは「賊」の行為で

あるとする。その上で、君臣の間に復讐の理はなく、大石が中国春秋の故事に倣ったならば自殺か出家かをしたはずである。処罰を顧みない大石の行動は勇猛だが、行ったことは賊なのだから、死刑にされて当然だ。ところが綱吉は大石らを忠義の士として自尽を命じた。だがそれ以前に、幕府が吉良義央の怯弱を戒めて追放していれば、大石が憤ることはなかったはずであり、吉良を許したことは、幕府の失態であるとして、幕府を非難している。

野呂定基の日記は非公開のものながら、荻生徂徠など当時の幕府の主流御用学者が主張し実行された、浪士に批判的な説と、論理としてはほぼ同じだと言える。だが赤穂義士の不思議は、あらゆる論理的な矛盾や彼らの行動の非正当性を超えて、死の美学と背中合せになった「壮挙」が、多くの日本人の熱い共感を呼び起こしたことで、それには演技伝承の『仮名手本忠臣蔵』が大きな役割を果たして来たことは、これまでも指摘して来た通りだ。

赤穂義士の一件における「義」の二元性をめぐって優れた考察を発表してきた田原嗣郎は、元来は別のものである、將軍と大名、大名と家臣という二つの主従関係が、相互に対立矛盾する契機を含みながらも、両者が統一的に併存する幕藩体制の構造的特質に、松の廊下から討ち入り、浪士の切腹、吉良の改易と嗣子の配流にいたる、一連の出来事とそれに対する幕府の対応の根源を見ている（田原、二〇〇六）。

このような幕藩体制を薩長土連合が覆した明治体制の出発に当たり、明治天皇の名で、朝廷として前例のない明確さで、大石良雄の行為を「固く主従の義をとり、仇を復して法に死す」ものとして顕彰したことは、どのように意味づけられるであろうか。

この勅書は、田原の言う幕藩体制下の二元的な「義」のうち、より根源的で情感にも訴える力の強い、大名と家臣の主従関係における「義」、つまり大石良雄らの討ち入りを、「固く主従の義をとり、仇を復して」と、まず称揚する。そののち、將軍と大名の主従関係、つまり幕府の掟との関係における「義」に従った切腹によって、「法に死」したことを顕彰している。幕藩体制下での二つの「義」を、新しい明治の天皇制のもとで、神格化された天皇への「忠・義」に一元化することに、この勅書の主たる目的があったのではないだろうか。

寛永と天和期の儒学者山鹿素行は、新しい兵学と『中朝事実』などの日本国体論によって、直接教えを受けた大石良雄や、後に素行を「先師」と仰いだ吉田松陰、明治になってからは乃木希典に、強い影響を与えた。乃木は自ら写本した『中朝事実』を、三宅観瀾の『中興鑑言』と共に殉死の前日、明治天皇から教育を託された、学習院での教え子、当時一〇歳の裕仁親王（後の昭和天皇）に、熟読するようにと手渡した。乃木と同じ長州閣で当時陸軍卿だった山縣有朋は、神格化された天皇親率の軍隊の規範「軍人勅諭」を、大日本帝国憲法に先行させ、憲法や議會とは独立のものとして、明治一五年（一八八二）、天皇から

の直接下賜の形で全軍人に配布させた。

このようにして、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」を第一条とする大日本帝國憲法（明治三二年（一八八九）發布）や、「我カ臣民ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」（明治三三年（一八九〇）発表）に見られる、皇国史観による君臣關係を軸とする国家構成原理、すなわち「国体」形成の倫理的基盤が作られていたのであろう。

## 六、上杉の側から

吉良義央は万治元年（一六五八）一八歳の時、出羽米沢藩主三十万石の上杉家から、上杉謙信を初代として第三代に当たる藩主定勝の娘で一歳年上の三姫を、富子という名で妻に迎えた。幕命による婚儀とする見方が有力である。寛文三年（二六六三）、二三歳の若さで従四位上に昇叙、この年に長男三之助誕生、翌寛文四年（二六六四）、妻富子の実兄で現藩主の上杉綱勝が、一九歳の若さで江戸で急死。上杉家は嗣子がなく取りつぶしになるところを、義央は、前年に生まれた長男三之助を、養子として後継者にさせることで、十五万石に減封して、幕府に存続を認めさせた。将軍家綱から一字を拝受して綱憲とし、長じて紀伊和歌山藩主徳川大納言光貞娘寧姫を嫁がせ、紀州徳川との結びつきにも配慮を怠っていない。

義央の長男誕生翌年の綱勝の急死は、義央による毒殺と見る説もある。博覧で知られる江戸文化研究者三田村鳶魚が、忠臣蔵の通説に異議申立てをした処女出版の力作『元禄快拳別録』（明治四三年、著者の持ち込み原稿に、三宅雪嶺、福本日南が序文を書いて啓成社から刊行）では、毒殺と断定しており、その典拠として「米沢史談」を挙げている。前藩主の娘富子との間に男子が生まれたので、これに藩主を嗣がせるべく、現藩主綱勝が江戸に来るのを待って、毒入りの引物を贈り、綱勝はこれを食べた直後に吐血、死去した。（三田村、一九七五、二二六頁）

米沢史の専門家小野栄によると、綱勝はこの日江戸城からの帰りに、妹の嫁ぎ先でもある、鍛冶橋の吉良義央邸へ寄った。茶の馳走になり帰邸すると、「夜半から激しい腹痛に襲われ、七日六晩苦しみ続けて、七日早朝に死去した。病名も判らぬ奇怪な急死であったから、江戸市中には、上杉家乗っ取りを企んだ義央の毒殺説まで流れたという」（小野、一九九八、五二頁）と、こちらは婉曲な表現で、断定は避けている。当時の米沢藩には重臣内部に対立があったため、米沢史料の信憑性には問題が残るだろうが、江戸で義央が勧めた物を食べた直後の急死だったことは、共に認めている。

いずれにせよ、義央が上杉家を継承することに機敏であったことは確かだ。高家として将軍に重用されてはいても、知行は四千石そこそこの旗本だった義央にしてみれば、半領とはなっても十五万石の藩主に長子を据えたことは、吉良家の財政を豊

かにする上で重要だった。以後、江戸呉服橋の豪邸新築をはじめ、万事派手好みの義央への財政支援が、上杉家にとっても大きな負担になった点では、すべての資料が一致している。

一方綱憲は、赤穂浪士の討ち入りの結果実父を失い、さらに実子で吉良家の相続者だった義周が、翌年二月幕命によって改易の上、諏訪藩主にお預けとなったことを受けて、同年八月実子吉憲に位を譲って隠居、翌年江戸屋敷で死。同年母富子もそれを追うように、波乱の生涯を閉じている。

米沢へは、私が所属する神奈川大学日本常民文化研究所の、置賜と縁の深い佐野賢治さんが主宰する農村文化研究所に加えていただいて、度々行っている。特に近年は、地域おこしのためには、農業を始めとする異世代間交流が大切だとする私の持論から、置賜出身の作家井上ひさしの傑作『イヌの仇討ち』や『不忠臣蔵』を見習って、手作りの「反・忠臣蔵」コンクールを催し、地元で異世代が混じって演じるだけでなく、海外との交流にも取り入れることを提唱している。グローバル化のなかでの地域文化の振興をテーマにした、二〇〇三年南仏アヴィニオンでの国際シンポジウムで、日本からの唯一人の参加者だった私は、上杉家を再興した鷹山公と置賜文化の活力について報告した。以来私は米沢とアヴィニオンが姉妹都市になって、毎年七月にアヴィニオンで開かれる国際演劇祭に、置賜からも「反忠臣蔵」をもつて参加しようと、米沢で呼びかけている。

米沢の上杉神社にも、華蔵寺と同じく、赤穂浪士たちの狼

藉を弾劾する「赤穂事件殉難追悼碑」【写真①】が建っている。これによると、

「元禄十五年十二月十五日黎明浅野内匠頭家臣数十人、吉良の本所邸を取り囲み狼藉に及ぶ、夜陰と言い、急変不意に依つて利を失い義央公害し給う、上杉家附き人、吉良のお小姓討死、五代綱憲公病床に在り、異変を聞こし召し驚嘆し給い直ぐ兵を集めて本所へ馳せ着き一人も洩らさず討ち取るべしと下知あり、已に出勢に及ばんとする処に、高家畠山下総守櫻田邸に馳せ来たり老中下知の趣を演達抑留せらる、綱憲公孝道を捨て、公聴の下知を承け、出勢の士卒を止められ、米沢藩十五万石の静謐を保つ、…(中略)…左兵衛義周配所上諏訪高島城に歿す。赤穂浪士事件の爲に上杉家の不幸後年に及ぶ、星霜茲に二百八十余年のち其の殉難の士を悼惜、…云々」

孝道よりは、老中の下知を重んじ、奮戦して重傷を負った義周が「不屈き」の科を受け、改易、幽閉に処せられると、綱憲もみずから「自分遠慮」を伺い、嫡子吉憲と共に「遠慮」を仰せつけられ「遠慮」は翌月御免となったが、綱憲は隠居し、その翌年四一歳で、失意のうちに死去する。大名も「老中の下知」に、それが理不尽であっても従う、徳川幕藩体制下での武士の行動指針は一体何だったのかと、田原嗣郎が指摘する幕藩体制下での「義の二元性」について、米沢でも改めて考えさせられる。

二代目上杉景勝は、豊臣秀吉に信任の厚かった荒武者として、信越、佐渡から、会津にいたる広大な地域を勢力下に収めてい



写真⑪

ながら、石田三成と通じたばかりに、家康による関ヶ原後の苛酷な信賞必罰によって、出羽米沢だけの三万石に押し込められてしまった。家康の関ヶ原の戦後処理が、長州萩に追いやられた安芸の大藩毛利の子孫の、徳川に対する深い怨念と倒幕への原動力を培ったように、以下に述べる近松門左衛門と大石良雄との結びつき、そして先にも触れた、彼らと吉良上野介との対立も、家康と関ヶ原を介して、米沢にまでこたま齎しているかのようだ。

## 七、なぜ近松は「忠臣蔵」の種本を書いたのか？

もう何年も前、中世フランス文学者松原秀一さんに教えられて、京都のハイブ라운な書肆として知る人に知られている青山社が発行している、『流域』という不思議な季刊誌を何号か読むうち、近松洋男というロマンス語研究家が、近松門左衛門の九代目の後裔として、三百年ぶりに解禁されたという近松家の口伝を綴っている文章に接した。

子どもの頃から芝居好きの両親に連れられて歌舞伎を、大学

生になってからは歌舞伎に加えて人形浄瑠璃をよく観ていた私は、『仮名手本忠臣蔵』の元になったのは、近松門左衛門が討ち入りの数年後に発表した、『兼好法師物見車』と『碁盤太平記』だということは知っていたが、なぜ近松が赤穂浪士たちの討ち入り後まもなく、『太平記』に仮託して「忠臣蔵」の原型になる戯曲を書いたのかは、全く知らなかった。

『流域』の近松洋男さんの文章を読むうち、この雑誌の文章よりも前、二〇〇三年に『口伝解禁 近松門左衛門の真実』という題の単行本が、中央公論新社から出ていることを知り、早速買って読み、目から鱗の落ちる思いがした。今年二〇一二年一月には、京都の御自宅にご高齢の近松洋男さんをお訪ねして、親しくお話を伺い、さまざまな貴重な資料も見せていただいた。

折角の機会に私一人何うのは勿体なく、近松作品のピカレスク文学からの影響に関心をお持ちだった文化人類学者の野村雅一さん、道行きなどの文体にスペイン文学との関連を考慮しておられた詩人の佐々木幹郎さんもお誘いして一緒に行っていたので、この訪問とその後の私たち三人の討論は、なお実り豊かになった。【写真⑫近松洋男さんと筆者、佐々木幹郎さん（左）、野村雅一さん】⑬洋男夫人修子さんと、スペインの陶板が嵌め込まれたお住まいの壁】

本稿で私が、伝説の形成について考えている口承文芸研究の視点からすると、この著書は、書承や物体伝承から口承化されたもの、そして或ものは三百年近く口承されていたものが、再



び書承化された結果という、極めて稀な興味深い例と言える。近松門左衛門の若い頃、特に初の浄瑠璃作品『世継曾我』を発表する三〇歳以前の青年時代については、これまで殆ど不明とされてきた。

生涯のこの部分がなぜ不明だったか、九代目の後裔である洋男さんに至るまで、ある部分はなぜ書き遺されず、一子相伝の口伝のままだったのかという、真つ先に起こる疑問については、洋男さんご自身が著書の冒頭に記している。



以下、「忠臣蔵」との関係にしほつて、洋男さんの今度の著書の内容を、私なりの関心から手短かに要約する。

家康による関ヶ原戦後処理の時代に、共に武士として不遇だった越前の杉森家から近江の近松家へ、

将来近松門左衛門となる一二歳の杉森次郎吉が養子に出された。養父の近松伊看は、赤穂藩の御典医を務めた人で、近松家は若狭国小浜藩初代城主浅野長政と縁が深く、伊看の先代以来、近松家は浅野家の厚遇を受けていた。そして赤穂藩の家老大石良昭（大石良雄よしちかの父）の推挙で、次郎吉は京都の一条恵観公（後陽成天皇の第九皇子）のもとで、有職故実の係の一人として働くことになる。瀬田の大石邸で、次郎吉は当時六歳の大石良雄にも引き合わされた。近松姓になるに当たって、次郎吉は元服して近松門左衛門を名乗る。

有職故実を調べる仕事は、後の浄瑠璃作者としての門左衛門を形成する、貴重な体験になった。だが年を加えるにつれて、門左衛門は同時に、赤穂藩と長州藩の事務処理にも関わって行った。赤穂藩から派遣された大石良昭は、赤穂・長州財政同盟の御所援助代表だったが、その禁裏方の事務補佐も、門左衛門は担当するようになる。

徳川幕府成立以来「禁中並公家諸法度」を始めとして、幕府の朝廷支配が進められたが、緊縮させられた禁裏の財政を救っていたのは、長州藩と赤穂藩からの、特に赤穂藩からは特産である塩を通しての援助だった。幕府は、外様にもかかわらず親密な関係にあった浅野家の浅野内匠頭長直を正保二年（一六四五）笠間藩主から赤穂藩主に転封し、赤穂の塩を手に入れようと試みたが、それ以前から赤穂藩が塩を通して禁裏財政を支援してきた伝統を覆せなかった。赤穂藩家老として御所

に派遣されていた大石良昭が、関白近衛基熙と姻戚関係にあり、門左衛門を一条恵観公の許に斡旋したように、禁裏に影響力を持つていたことも、一因と思われる。

当時幕府の高官筆頭として朝廷に頻繁に赴いていた吉良義央は、赤穂の塩の専売権を幕府に回そうと画策していたが、思うに任せなかった。この件についての禁裏方の事務補佐だった門左衛門は、吉良義央と出逢うこともあったに違いないが、役人としての格も年令も大差があった吉良義央と、対等には渡り合えず、切齒扼腕したことであろう。この時すでに、五〇年後に浄瑠璃作者として、「忠臣蔵」の原型となった『兼好法師物見車』と『碁盤太平記』を発表する門左衛門の原体験として、吉良上野介対浅野内匠頭という構図が、現実のものとしてあったといえる。また前述したように、「松の廊下」の一件を聞いて、東山天皇や関白近衛基熙など朝廷の中樞部が欲びを隠さなかった背景も、こうした当時の朝幕関係のなかで、理解できる。

ここで、「松の廊下」の原因を塩田にまつわる確執に求める説について、一言しておこう。吉良義央が入浜式塩田の先進地であった赤穂に、塩の製法について教えを請うたが拒否されたので、それを恨んだと見るのである。昭和一九年（一九五四）に尾崎士郎が『きらのしお』と題した作品で述べたのが始まりとされている。その後、この塩田説は「忠臣蔵」をテーマにした小説、NHK大河ドラマ『峠の群像』（堺屋太一原作）などを通して、広められた。しかし、古文書も含めてこれを裏づける

資料はない。また、三河の饗庭塩あえはの製法は、赤穂の地理的条件に恵まれた入浜式とは全く異なる方式であって、赤穂から技術導入する可能性は初めから存在しない。加えて、幡豆郡の製塩に関する詳細な調査の結果、複雑に入り組んでいた複数の領地で、旧吉良領には塩田はなかったという結論が出た（『吉良の塩田』、吉良町教育委員会、二〇〇一。特に「塩田説」をめぐっては一二頁の「コラム」参照。この点に関しては、近松洋男さんの本（四八〜五〇頁）も「塩田説」を採っている。

## 八、「塩の道塾」から近松が学んだもの

話を元に戻そう。主人である一条恵観の逝去を機に、二〇歳の門左衛門は恩人である大石良昭の強い誘いに応じて、御所勤めから一〇年契約で赤穂藩勤めへと転進する。赤穂藩での実質上のパートナーとなったのは、六歳年下で一四歳の、だが優れた構想力と責任感をもった大石良雄だった。良雄が語った構想はこうだ。「赤穂の先導により、京・大坂の商人が全国に塩の道を張り巡らせるような仕組みを作り、幕府の力が及ばないようにする。ゆくゆくは周辺諸国とも塩貿易を展開したい。」この目的で、京都山科の外れにある高観音近松寺に内密の塾を開き、門左衛門を筆頭塾生とする。

大石良雄は、「禁中並公家諸法度」以来の朝幕緊張関係のなかで、赤穂と長州が禁裏財政をいかに支えて来たか、その費用

捻出のために赤穂塩業の発展が必須であることを、数字を挙げ  
て門左衛門に説明した。赤穂では、新藩主浅野長友および筆頭  
家老大石良昭が門左衛門を接見し、門左衛門は一〇年間赤穂藩  
の「塩の道」作りに全力を尽くすことを誓った。同時にこの間  
の活動は一切極秘として国史に跡を残さぬとの約束が交わされ  
た。これより五年後、大石良雄は父良昭の三四歳での死去に伴  
い、一九歳の若さで千五百石の家老となった。

「塩の道」計画実現には、近隣諸国との交易のため、海外経  
験のある技術者やスペイン語の教師が必要だった。三代將軍家  
光の鎖国令から三〇年あまり経っていた当時、出国したまま鎖国  
令で取り残され、辛うじて戻った日本人航海技術者や、日本  
滞在中の鎖国令で出国できず身を隠していたポルトガル人、カ  
トリックに改宗しない科でスペインから追放された「セファル  
デー」と呼ばれるユダヤ系教養人、ユダヤ系カタランの棄教  
修道士など未公認の亡命者として日本に残っていたスペイン  
人、それに明国人が、教師として塾に集められた。

この「塩の道塾」で門左衛門は、スペイン語を習得し、教科  
書代わりに与えられたスペイン・ルネッサンス詩劇集を朗誦し  
た。これらが後に劇作家としての近松門左衛門に、大きな影響  
を与えたこと（スペイン詩劇の五幕構成と、近松浄瑠璃の五段  
構えなど）は、近松洋男さんのお宅に一緒にお伺いした野村雅  
一さんや、佐々木幹郎さんが考えていた通りだ。

門左衛門は、言葉の才能によほど恵まれていたのだろう。ラ

テン語の章句も暗誦したらしい。『碁盤太平記』とほぼ同じ頃、  
竹本座で上演された『酒呑童子枕言葉』の四段目源頼光が大江  
山で酒呑童子を退治する「頼光山人」で、姿を現した酒呑童子  
が、まず不思議な言葉を発するくだりがある。「いんにんぎゃ  
らいがるまんすうがうがうらうとて入けるか。只けだ物のほゆ  
るがごとくさらに通ずることはなし」とあるのだが、このくだ  
りは浄瑠璃の一中節「頼光山人の段」にも取り入れられており、  
無論意味不明のまま語られている。一中節では「インニンギヤ  
ラン」となっているのだが、ロマンス語の専門家である近松洋  
男さんに言わせると、これは俗ラテン語で、「インニンギヤライ」  
で意味をもつ言葉であるという。洋男さんの訳では「ギャロン  
ヌ川のフランス娘たちよ／龍女を称える歌が頭上を流れて行く  
ぞ」となる。二〇〇四年読売テレビ制作のドキュメンタリー『歴  
史ロマン紀行 追跡！文豪・近松の謎 忠臣蔵との関係』で、  
洋男さんがマドリッドのコンプルテンセ大学教授でラテン語の  
権威とされるゴンサレス教授を訪ねてこの訳を見せたところ、  
ゴンサレス教授もほぼ同じ内容の訳をつけた。

「塩の道計画」のために、門左衛門は同盟藩の長州もよく訪  
れ、九州の唐津や平戸にも行っている。塾で習った明国人から  
も、明のために台湾からオランダ人を駆逐した、台湾で神格化  
されている英雄で、平戸の日本人を母に持つ鄭成功については  
学んでいたに違いない。『碁盤太平記』や『冥土の飛脚』のあと、  
空前の大ヒットとなる『国性爺合戦』を書けたのも、「塩の道

塾」での研鑽の賜であつたらう。「国性爺合戦」につづく『博多小女郎波枕』は、密貿易をする海賊の頭領の物語だが、こういう類の話も、「塩の道計画」の体験がなければ、あれほどの迫真力で描くことはできなかつただろうと思われる。

## 九、三〇〇年口承の謎

近松門左衛門が、身内のことを一子相伝で、三〇〇年の間は書くことも他人にも話すことも禁じたのは、門左衛門が、養子縁組した先の近松家での、義理の甥に当たる近松勘六が、吉良邸に討ち入りした四十七士の一人であり、本人は切腹したが二人の遺児、七歳の娘げんと当歳の男の子文四郎は、門左衛門が養子として引き取つていたという事情が関わっている。

幕府の掟に反した犯罪者として、切腹という死罪に処せられた赤穂浪士の遺児たちはすべて、出家した者と一五歳未満は留保されたが、浪士の切腹二カ月後に遠島たもとつまり伊豆七島などへの島流しという、死罪に次ぐ重罪に処せられた。

六年後の宝永六年（一七〇九）、將軍綱吉の逝去に伴う大赦で、浪士の全遺児が赦免されたが、浪士は切腹前に子どもの年令書を提出させられていたのに、勘六は子が二人あることを秘していたのか、とにかく発覚すると咎めを受けかねない状況にあつたらしい。文四郎は、少年期に入つてからは、祖父小右衛門幸正の許で医術を学び、修業後は大坂の門左夫婦の家へ帰り、名

を恭和と改めて医者になった。

後に、没年享保九年（一七二四）には、近松一族の最長老となつていた門左衛門の同意を得て、文四郎は京都近松家初代近江屋治郎兵衛に養子の嗣子として引き取られ、京都近松家の二代目となつた。だから近松洋男さんは、系譜の上で勿論劇作家近松門左衛門の子孫だが、血のつながりでは、門左衛門の養子だつた近松勘六の長男、二代目近江屋治郎兵衛の七代目の直系の子孫であり、ご自身が赤穂浪士の血を引いていることになる。

最近まで近松家の歴史が口伝のみで文書化されなかつたもう一つの理由として著者洋男さんが挙げてゐるのは、洋男さんの直系の曾祖父に当たる二代目近松安兵衛が、祇園の北西端末吉町の近江屋の敷地内に、元治元年（一八六四）豪壮な「近江安」新館を造り、ここが明治維新の前夜、公武合体運動の密議の場となつたことだ。禁裏方で公武合体派の巨頭と言われた公家の岩倉具視、長州藩の桂小五郎に加えて、一橋慶喜は、將軍家名代として徳川幕府を代表しながら、あわよくば政局の主導権を握ろうとしていた。

「近江安」新館ではない三近江屋の一つで、河原町薬師西南角にあつた味噌醬油屋は、『国性爺合戦』に感動した坂本竜馬が、盟友中岡慎太郎との密会の場所にしてゐた。そして大政奉還の年の暮、二人でいるところを刺客に襲われ、龍馬は即死しない翌朝息絶え、慎太郎は重傷を負つて二日間生きのびて死亡した。二人が襲われたとき部屋にあつて血を浴びた、赤穂浪士の手紙も混じる貼り合わせ屏風は、京都国立博物館に所蔵さ

れて、国指定の重要文化財になっているという。事件の時、この近江屋は危険を察知した近松家の手を離れていた。

明治維新の前夜、勤王志士が密議の場として出入りしていた京都近江屋（二代目近松安兵衛が館主）に対しても、新撰組や京都見廻組からの有形無形の圧力は強く、近松安の本館は、放火によって全焼させられてしまった。（近松洋男、二〇〇三、一六頁）

このように、お上（幕府）の公的権力による刑罰の危惧や、新選組、見廻組などの隠密組織による暴力に曝され続けて来たことへの最低限の自衛手段として、書いたものに遺さず、一子相伝の口承を三百年保たざるをえなかった現実の近松家の一面は、近松門左衛門の浄瑠璃作品だけからでは、到底想像できない。

## 一〇、まとめに代えて

愛知県にゆかりの人物吉良上野介義史をめぐる「伝説」の形成において、さまざまな種類の書承と口承、画像⇨視覚表象、語り芸⇨聴覚表象、芝居・映画・テレビドラマなどの総合的行為が表象が果たした役割を、不十分ながら概観して来た。

伝説は、それを享受し伝える生きた媒体である、輪郭を定めたい複数の人間によって、作られ担われる。現代以後は電子媒体によっても、これまでとは全く異なる伝達、拡散の様相を呈するだろう。同時に、吉良上野介伝説を含む「忠臣蔵」伝説群は、日本ではこれからも形を変えながらも衰えることなく享

受されて行くだろうが、現在のグローバル化の趨勢のなかで、これほど「日本人」にはよく解り、「日本人以外」には説明がむずかしい伝説群も稀なのではないか。そこでは、伝説を支える文化の違いの問題も提起される。

### 【参照した主な文献（順不同）】

A 史実にかかわる資料（抜粋）

吉良町史編さん委員会『吉良の歴史』愛知県幡豆郡吉良町、二〇〇四

「旗本吉良氏の成立と吉良の領主・江戸時代」、吉良町史編さん委員会『吉良の人物史』愛知県幡豆郡吉良町、二〇〇八、五九  
↳二四頁

吉良町教育委員会『吉良の塩田』愛知県幡豆郡吉良町教育委員会、二〇一一

吉良歴史民俗資料館（西尾市吉良文化広場）展示資料

山鹿素行會編『山鹿語類』四卷、國書刊行會、一九一〇

一九一一

廣瀬豊『山鹿素行言行録』三省堂、一九三九

『歴史評論』六一七号、二〇〇一年九月号「特集 赤穂事件・忠臣蔵から時代を読む」歴史科学協議会編、校倉書房、

二〇〇一

平井誠二「朝廷から見た赤穂事件」（『歴史評論』六一七号、二〇〇一年九月号、一六〜二八頁）

三田村鳶魚『元禄快拳別録』他、「三田村鳶魚全集」第一六卷、中央公論社、一九七五

西山松之助監修『図説忠臣蔵』河出書房新社、一九九八

小野栄「上杉弾正大弼綱憲」、西山松之助監修『図説 忠臣蔵』

河出書房新社、一九九八、

近松洋男『口伝解禁 近松門左衛門の真実』中央公論新社、

二〇〇三

中央義士会編『子孫が綴る赤穂義士「正史」銘々伝 忠臣蔵

四十七義士全名鑑』小池書院、二〇〇七

復刻本『類柑子』（渡辺ユリ子注解）新水社、二〇一二

## B 史実を基にした評論、創作、参考図書（抜粋）

後藤丹治・鎌田喜三郎（校注）『太平記』第二十一「日本古典

文学大系」三五卷、一九六一

近松門左衛門『兼好法師物見草』宝永三年一七〇六（?）、『基

盤太平記』宝永七年一七一〇（?）、「近松門左衛門全集」第

六卷、岩波書店、一九八七

西澤綺語堂一鳳、一八九六（博文館校訂『校訂忠臣蔵浄瑠璃集』

（竹田出雲他『假名手本忠臣蔵』を含む四七の浄瑠璃・歌舞

伎の忠臣蔵物を収録）『帝國文庫』第三八編として明治二九

年一八九六、博文館から再刊

山本常朝（和辻哲郎『古川哲史校訂』『葉隠』上・中・下、岩波文庫、

一九四〇）一九四一

尾崎士郎『吉良の男』中央公論社、一九六一

田原嗣郎『赤穂四十六士論 幕藩制の精神構造』吉川弘文館、

二〇〇六

眞山青果『元禄忠臣蔵』『眞山青果全集』第一卷、一九四〇（初

演は一九三四～一九三五）

丸谷才一『忠臣蔵とは何か』講談社文芸文庫、一九八四

井上ひさし『不忠臣蔵』集英社文庫、一九八五

井上ひさし『イヌの仇討』文芸春秋社、一九八八

池宮彰一郎『四十七人の刺客』（原発表一九九二）新潮文庫、

一九九五

池宮彰一郎『その日の吉良上野介』新潮文庫、一九九八

岳信也『吉良上野介を弁護する』文春新書、二〇〇二

阿部達二『江戸川柳で読む忠臣蔵』文春新書、二〇〇二

有賀沙織作ミュージカル『吉良、さらさら』、ステージア

トグループKASSAY、演出：たかぎひろみち、美術：

KASSAY、音楽：佐藤ぶじを・吉田豊、配役：吉良上野介（江

原真二郎）、浅野内匠頭（関口晴雄、俳優座）、その他、福沢

良一、角谷栄次（劇団民芸）、岡田里美、大川婦久美（東宝

現代劇）、梅原妙美（東宝現代劇）、川島大典（東宝ミュージ

カルアカデミー）、西尾市文化会館小ホールで、二〇一一年

一二月三日（土）～四日（日）、東京都江東区深川江戸資料

館小劇場で、同年一二月一四日（水）に上演

（かわだ・じゅんぞう／神奈川大学日本常民文化研究所）